養生随筆

下

内閣文庫
和書 類
二二六九一 號
三 冊
一九五 函
七 架

内閣文庫		
番號	和 22691	
冊數	3 （ 3 ）	
函號	195	137

国立公文書館
National Archives of Japan

養生随筆巻之下

河合元碩口授　門人林克筆録

痢病ハ下利の利の字に疒冠りをしたる義にて形を以て名け
しものなり然も夏秋の間に病ひにて平生飲食の節を失ひ
脾胃虚耗して生物を食ひ冷水を飲又多かく夜分に冷風を
冒し或ハ衿褥を脱し外邪脾胃を冒し熱となりて痢と成
初め発表発汗して熱を表へ逐ひ退くる時ハ速やかに治する也
然るに病人ハ大便下りを圖に登ること数十行後痛して
裡急後重も窘迫して下らざれ大便さへ快く下りしハ痛ミる

明治九年購求

あるやうにと思ひなさるゆゑ下剤を欲するもあり医者も病人の言に任せ下剤をあたへ熱を下しなば痛も和らぐべしと言ひ勧むるされバ下剤を与ふる故に元冷し所へ又寒涼の下剤を与ふゆへ熱表へ発せずして裡へ陥りて闔の度数日に増して遂に後には食も減し形骸も疲れて重き痢となる故に最初の度数より窘迫するも後痛にも拘らず先発汗剤をあたへて熱を表へ逐ふときは痛も窘迫も和らいで度数も自ら減して速に治するなり和田泰純治痢の法予が説と符合するなり素人も能勝手を心得よと言ふ事あり是ハ痢後凋疲のものあり熱未だ

解せざるうちに食すれば必害を生ず熱全く解して後凋疲あらば用ゆべし妨げなし又世上に痢の妙薬と云て痢を止る丸薬あり然も痢已に日数を経てのち熱解して利の止ぬときに抜すべし害なきことなし然に熱いまだ解せざるうちに抜すれば利止て腹脹て食も進まず大に害をなす妄の売薬を戒しむべし痢を病ぬやうに平生に心を用ひ座して夏秋の間飲食を節すべし又治おを禁し不換金正気散を青蓮の藿香にして桂枝を加て毎日一貼づゝ服すれば痢疾気を病ざるなり枇杷葉湯を暑気あたりと云て爰薬にすれども然ハ暑気除なくハあらん食

滞の方なり四季ともに食滞にハ宜し然れども右の薬品を
吟味して用ひざれバ効なし麦芽ハ本方に非ず且薬の下品也
効なし本方枇杷葉七分青葉藿香五分桂枝五分唐木香二分呉
茱萸二分莪朮三分甘艸一分右七味袋に入れ熱湯にて能く擺し後を
三度擺して後水一合入五勺に煎じ彼是食滞の妙方なりき
痢病に虚痢実痢の分ちあり実痢ハ熱劇しくて腹痛して渇き
圊に登ること度なく大便熱臭甚しく色味噌のあめのごとく
或ハ血を帯るあり此泄ハ治し易し熱少く渇も少く腹痛して
裡急後重して圊に登ること度なく大便膿血魚脳のごとき

ものを下し熱臭なし此證治し難し早く良医に任せ療し
治法を誤まれバ不治となる痢ハ大便の色を見て虚実を知るの一つ
なり又禁口痢と云ハ口を閉るやうに食の食へぬ形をいふもの
あり別に禁口痢といふ病ひもあるにあらず最初早く手当をし
て良医に任せれバ禁口痢までならざるなり又夏秋の頃より小
児の中暑と云泄あり最も夏の比世上にハ中暑といふなれどもこれを
中暑にてハあらじん中暑あり此泄最も重きものハ朝に発して
夕に死するもあり或ハ二三四日を経て死するもあり身熱焚がごとく
手足搐搦して直視上竄して煩渇し大便黄水を数行なし

熱稍減するや否や手足微冷すると見れバ已に厥冷して救ふ
べからざるに至るなり此證ハ熱少熱いまだ発せざる前に起居も
食するも元気も平生の如くなる時に大便も平生の如き滑便
を形く山の如く通ずるも其まゝ母親もうちすてゝおくこれを
しらぬものなりこれ後に熱を発して焚か如くなる事あり小児
固より脾胃弱く夏の後肉の治る比く其気に中りしなり此證ハ
乳なき所の小児又ハ乳の不自由なる小児飲食節にあらく脾
胃の虚損せし所へ其邪に中るなり乳なきの小児乳の不自
由なる小児ハ特に心を用ひて早く良医に托すべし熱劇しく

しく要ずしもきれとも虚熱にあらず実熱にハあらじ最危篤
の症なり初めの大便に心をつくべし予が故今の方言にいふを
痰證と云京師に間あり浪華にハ稀し痛所も形をあらはし
多ましものなり風に感じて痛むといふ事あり内傷に外邪
を兼るもの多く平生肉食を饕り胃中に痰飲を生しる中
風湿を冒し或ハ湿地に起臥し或ハ風湿に感じて盛なる
ものを多く然して又被浴し漸く日を経て湿気周身に留滞し
胃中の痰飲骨節に流注して熱となり周身骨節疼痛す
るなり最初に発汗して熱稀粥を食とし暖室に居て外

邪を冒さぬやうにし衛りて風湿を表へ退くる時ハ痛も稍和ぎ
眩くなりて日を追て治するなり此病ひハ緩に治すべし歴節風
とハ節を歴て痛むといふ義なり人身の節ハ腕骨とて多く腕
あるゆゑなり其腕骨へ風湿流注して節を歴て痛なり痛ハ
惣て熱なり白虎痛とハ湿熱骨髄に流注して虎の咬むが如
く痛むをいふなり鶴膝風とハ鶴の膝の如く瘠衰ふるなり
血液枯燥して鶴膝風となるなり痛風歴節風鶴膝風惣て
皆風湿より発するなり何れも宜しき方とてハなし其上に
て人毎に異なり瘧ハ虐字に疒冠りをせしるして虐ハ暴

虐とて桀紂の悪虐ありて民を苦悩せしむるを暴虐といふ瘧ハ
寒熱往来戦栗して人を苦悩せしむるの形を以て名づけしもの也
これも内傷に外邪を兼るなり風寒に感じて夜臥衿褥を
侵し冷気を冒し風寒に感ぜしむるを覚えず冷物肉汁を飲食
邪気心肩に盤居して瘧となるなり然より発行発表して心
胃の邪熱を逐退くるときハ早く治するなりされど病理を推究
せずして治しがたし如何となれバ寒熱往来戦栗の時ハ悩も
苦しさもあれども熱退きさるときハ平生に異ならねバ間日など
ハ平日に同じき由へ嘘言まで門をへも出て風寒をもあたり

毎日再感するゆへに治せざるなり熱退きしときも間日も密室
に居て温袍を衣て始終発汗して居るときハ寒熱往来戦
栗する毎に邪気日々に解して治するなり何も五ッ六ッハ
戦栗せざれバ悪し熱の解せぬうちにやたらに截薬を用ひて無
理に截ると頭痛がしたり食の進まぬやうになり或ハ瘧母と
なり一旦截るとも復再び発するなり始終発汗して邪熱
を追ひ退くるときハ截薬を用ひずして自ら治するなり又
熱已に解すれとも日々に再感して日数を経て医者の薬も退
屈して祈祷や禁呪でも截ることもあり是ハ日数を経て

十三夜も戦栗して熱解してのちハ截るまとも最初の熱壮んなるとこ
ろハ截れぬなり水腫ハ小便不利より腫るゝ形ちにつきて名づけたり
湿気腫とも違ふなり脚気腫ハ脚より腫て熱ゑ壮んなりみ
腫ハ腹より腫て熱なきなり水腫に虚腫実腫虚実間の
腫あり虚腫ハ不治の證あり治すべき證ハ不治の虚腫にて
老人小児或ハ壮年病後脾胃虚衰して手足の腑より腫て
小便よく通じて腫る且そのうへに腫るものハ総て不治なり
虚腫の治すべきものハ小便不通じて多く腫る虚腫ハすぐて
手足の陰ぞ内腑に腫を多く指をもつてこれを按すに其跡

窩なりて起り又ハ是飲食節を失ふ事日久しく脾胃虚損せる
ことは譬ハ川の堤の蟻の穴や蟹の穴より敗れて頽れて田畴一面
の潦るゝがごとし是通利の剤を用ひてハ通せざるのミならず反て
元気損耗する也是ハ参附又ハ鯉魚等の剤を用ひてハ通せ
ず也し良医に托すべし実症ハ小便不利にして且痺を発ひ
て手足腰脚外腫に症多く指をもつてこれを按せバ甚凹所
ちござる起るもの是これハ少壮の人飲食酒肉を饕て脾胃充塞
して宿食並に濁液を生じ水道塞て小便通せずこれを譬ハ
砂石積りて下流を妨げ水田畑に溢るゝがごとし其砂石を化

へ除くときハ田畑の水流に随ひて下る麦飯赤小豆を食として
通利の剤を用ひず実症ハ速かに治し易し又虚実間の症ハ小便
不利にして大便溏し内腑外腑ともに腫も血液枯燥して口中
乾く痰火壮んにして微熱あり是を按して窩になるも非も亦直に起るも
あれバ虚中に実を挟むものなれバ其薬的中せざれバ小便利を得て早
く良医に托すべし元気ハ去て治し難し最も心を用ゆべし
大率素人の意ふまゝハ人腹中又ハ腹中に病ひといふものあると
意ふ也一切の病ひに一切の薬と定りたるものゝやうにおもふ輩
もあれども人腹中にも腹中なる病ひと指せるものハひとつも

なし總て病ひといふものハ気血循環の條理に違ふなり腹中の
病ひと指すなれハ蚘虫と血塊とのミならず他に指さべき
病ひハなし鼓脹とハ腹が太鼓の如く脹といふ義なり貴公の
病ひハ腹が太鼓の如く脹る病ひなれバといひて病名とハ意ハず
鼓脹といへハ鼓脹といふ病が腹肉にあるやうに意ふなり故に
病家にも医者に病名を問ふハ是亦無益のことなり併し是を
問ふハ粗忽に問なん浮か不問でも医者が鼓脹と云て其鼓
脹といふ義を推質しても其訳を知て医者支飲なりといはゞ
其支飲の義を推し尋ねて其訳を知でも鼓脹とハ但上皮の
形を以て名付しものなれバ鼓脹の訳ハ血脹気脹寒脹熱
脹虚脹実脹の別ありて素人ハこれを知ても益なき故これを問ハ
無益のことなり病名を問よりして病人死ぬるか生るか治
るか治せざるか急に治するか緩に治するか治し易きか治し難
きかを問てこそ心得て勘弁して保養もすべしされど医者
も胃をおして治療して勿論急変ハ言ハぬものなり膈ハ胃膈にて
むねといふことなり膈噎といふハ膈に食の塞るといふ事にて
形を以て名付しものなり膈ハ百日経ると死するなどといふ人ハ
甚鹵莽なる言なり膈噎などと云ふ病因人毎に異り良医

杔しく保治されど必皆治する事なし黴毒ハ黴雨梅雨と云黴梅音相通ずるを以てなり黴ハ陰也といふ意なくしもしてあまりよりひの生ずるの義にて人身の黴毒も天地の黴気に感じて漸く年月を経て或ハ疥癬或ハ臁瘡となる妓女の黴毒に感じて一ちは毒陰茎に発されて下疳といふ一ちは毒両腿合縫の間に発されども便毒といふ俗にいふ横根なり一ちは毒発して楊梅に似たるを楊梅瘡といふ是皆発する所の形によりて名づくるものなり総て皆黴毒なり黴毒ハ漸を以て感じて年を経て発するものゆゑ速に治せんとするハ妄説なり急に治せん

として妄説なる薬を用ゆる故に癥痼となるなり殊に治療の宜きを得ざれバ難治にしてなほらざるなり土茯苓を主として軽粉も用ゆべき所と時とあり是用ゆべき所にて非ずして妄にこれを用る時ハ遂に不治となり廃人となるもの夥し是に恐るべきことなり瘟ハ冤字に疒冤りをなしたるにて冤ハ屈るの義なりて心血平生の鬱理をへだてて度を失ふなり瘟の病候千状萬態其人毎に異にして挙て記すべからずこれ本ハ小児の時より瘟ずして成長の後或ハ女色を犯し或ハ事に触れて心気を痛めしより発するなり一ちは最甚しき者ハ心血欲して狂を発するなり一ちは

狂を発するや数多発し狂乱して劇しく傍ら四五人にして是
を制御すること能はざるの時に及で早速薬を用ひ療する時は速に
治するものなり予癲に於て自得の経験の法方ありて是まで多く
人を治せしものなり狂乱至て劇しきものも速に治し易く速に
治するものなり発してのち年月を経て血気已に衰へて但静に
して鬱々と黙々たるものは治し難く後には癡人となるものあり又
世上に癇狂又はといふことあるこれは皆総て癲なりて癇狂人といふ
ものは一人もなきものなり甚明かなる証拠ある事なり冗長
なれば今ここに弁するにいとまあらし近世に西陲を治むるのこ

又近世ある人の心得違ひにて難産に死するものは産婦あり
妊娠は婦人の常にして病人にはあらざるものなり飲食を節にして
起居動作を勤め臨月に及て天の時を待つ時は易く生るるは必
定なり故に貧家日夜身を運動して疏食菜羹を飯ひ臨
月に及て天の時を待て難産するものは未だあらざる
なり衣食に富みて妊娠すると医者にかかりて毎日薬を飲み
病人のやうに心得て起居動作に怠りて美味を食ひ此は毒なり
の此は忌むなどといひて薬を呑みは口になれしやうにといひて己
度の外に種々のものを食ひ臨月に及て今も生るるも知れぬ

とく温婆を呼ぶやら医者の薬やら温婆ハ夜ひる寝ずしやと云
医者ハ早くせしやと云今日か明日かと待つ己に夜ひるになる
されハとふしく遅ひなどといふて夜日一日二日三日と毎日
医者の薬る廿日ほどよりハ温婆ハ昼夜の看病もなく母親や出
入の婆が更らく出ときをもる廿四日ほどに徹し腹が痛む稍痛
が増と手足に艱難にそれぞ辛抱するなく覚悟るなき事へなし
催生薬を呑やら臍て探し今宵の潮時にハ生まるといふて後
うし擁く介抱し揉る皆呼ことゆうて努力妊婦ハ気を悶し天
の時至らされバいか程努力ども悶ても生まれず三日も四日も

努力ても生まれず心気胃脇へ詰上て下へ降られず遂に頓死となる
も夢く数ふべからず大抵の産婦を弄ぶぞして唯振損のこと
にて温婆も医者も益なきことをなして却て害ありて天の時来
る時ハ医者でも温婆でも生まれるを生ませさるのにあらず死なる
なり温婆ハ取上婆といふて生む婆にはあらず子生れてのちに
其上を洗ふすをするとせるものなり又産婦子を産し時に
居る者のまゐを用ひし甚大事のことなり産して居るに於て
心静に安き体にゐて佛手散を攪し用ひ方当帰川芎益母
草各七分づつ一夕に湯浸飯を少し食ひ得と心を治め気を

調へて而後に目を閉て左側の辺き蓐に靠に居るべし
枕ハ高くすることよろし翌日より漸く枕をさぐべし脚ハ伸を
べし屈るハあしゝ子をうみていまだ居りあらぬうちに係に
起居動作をすれバ自腹ともに上へ衝上るゆへに血暈するなり此
血のあがるのミならず全体の骨筋が動きて心に衝くならバ産後
調理を専にて居るべし子を取揚ることを急ぐべからず産後
穏なる心を用ゆべし産易しといへどもかならず扇るへからハ治を急ぐ
べからハ大抵二七夜後浴せべし産後三十日八草蓐に在らて
起居をなずるまゝべし妊娠十月の間腹ろ日々に外へ腹出せし

るゆへ急にハ故のごとくなりやすからぬものなり気血故へなりやすからぬ
うちに妄に動作すれバ即坐に其害をうくることも往々
邪気の病ひとなりて何様薬を服しても効なし此證世に甚だ
多し婦人の産に多く病あるハ必産後より起ることなり且陰門を
固く絶べし風寒を冒さぬやうにすべし風寒を冒すと蓐労と
なりて治せぬものなり産後ハ産前とハ万事ちがふものなり妊身ハ但
天理に従ふべきものなれバ生に假し子痛を発されぞ治し難し寛政
五年癸丑予旧藩に在し荊妻年十七にて初めて妊娠せし子の
十月上旬に経を見る後経に経なくし正月胎むするに明かに知し

平しもへ着帯を祝して夫婦の閨房を別ち平生起居動作を
つゝしめ妊身に書を読めバ善き子を生むなどいへる書をよませ
行儀正しくして勿論淫事を絶して六月下旬まで至健なり
しかるに飲食起居も常のごとくなりしが六月廿七日頃より小便頻数にして
大便硬く秘結ありし腹ハ左肋拘攣して心気鬱々として有しが
七月二日残暑堪難きゆゑ朝より五度も圊に登れども通せん爲
暫に圊に登り居て僅に少き出でし故急に立て行事ハ頭面を
壁にあて俯むきなりしが目吊し口禁じて人事を知らず急ぎ
抱き携へて床に臥し涌の湯もて割て大急に涌の水を口に含て

頻に吹掛ければ目瞳を定て直発して手足搐搦して居たるに返て
鍼医も来て通もあるが復目吊し口禁して人事を知ら
ず鍼治をして薬を鼻より吹こんで漸く口開き目瞳を開く
治て後ハ復発もせずしておさまりたるを悦びつゝ
二日夕より翌三日の朝までに発すること十一度なり同寮の医
師親戚衆まで深く憂ひたる是を免とされど治せずと評
議一決して急に産科を招き深く回生の手術を以て無理
に引出し産せしめたるが巳の刻なりしが全く免をしたり暫くなる
と復発して朝より至て夜半までも復七度発して已る

公死に究りて日察告一間に生を圍て酒など飲て竊に後を
ろきけるにむ家に男姑ハなくし白人の好色者にて寡婦の至
寝りるる故に影く子癇を発せるもどらて平を泌りみる然
るに二日夕より三日午まて薬方も屡将して熊胆朱砂黄
連人参紫胡羚羊角等服させる所なくて三日午後一老医
の案りて抑肝散を立として夜丑の刻ばかりて頻に六七
貼を服しらて神交ばよりて同吊口禁治りて寅の刻りて至て
精神美の覚たるがごとく神てよく人事をもりて便器にまり
溺便暢く通して心気益快くなりて子を産しけるハ労て死り

ざりし九死一生の危きを免れて後百余日を経て平生に
復せしなり予竊に子癇を発せし所由を考ふるに予が読
書癖ありて妊身中に書を読ませ且夫婦の交を絶し大に養生
の節を失ひしよりて発せしなり妊身に夫婦の交を絶べきの
戒ハ古今の書にもいまだ労てあらざるなりまて世俗のいひ習
なせるに倣て閨房を絶し又自身の行ひを慎ミなき媱もある
ましそれとも壮年六七ケ月の間妄情動かさるるあたまん
旅に竊に家婢の閨襦に匍匐し或ハ土妓私窠子の舎に
到て姪婦ハ絶て己が腹脹の妬に夫の情の薨ゑんを恐るハ

婦人の通情にして然も夫の我を愛しまざるハ妊娠嗇生の為なることハよく会得ハ志たれども心に快からず妬情日々に起るを忍びしより遂にかく子痫を発せしことを推知し爰に年十月復妊娠をし前年の覆るに懲て夫婦の交も平せの如くなして凌ぐも但心経にして起居動作を勧させ朝夕環繞(?)漕瞥に月日を送りけるに翌甲寅の七月十一日恙なく男子を産し産後飲食を節にして淫する事を絶し三十餘日草蓐を居て毫も病む所なし児も健やかにて胎毒の患ひもなく三歳まで痘を発し至て軽く西郷唯二三点抓(?)そまで了し昔日妻の

子痫の時に同寮の予が多淫を諫ざりし医案の中にさざましてある(?)ことも深く又予が無頼のことどもを吐露して後来に示して親戚同寮の新婦初産にて皆予が跡を聞ひて難産の禍ひなし予浪華に在し時友人某妓を贖て側室となし側室年三十余にしてはじめて妊娠して友人其年長しての初産に平生の虚弱を以て出産を大に恐るる予が経験を聞て予に托せし由へ予も彼をして次第平生の如くにして起居動作を勧させ其愛情をも為よりも倍し友人の遊斜を戒めしたるに妊娠中も健やかにして分娩も安らかに穏く

臍生の時ハ予一人傍に侍座して疫痛を忍ひ居たりしが温婆
のいまだ来らざる内に産れたる女子にて胎毒の患ひも無く
痘も軽かりしなり世上新婦妊娠せば天の理を得と合点し
平しく臨月臍生の時ハ疫痛の劇しきハ當然となして揚ぐ
なとの辛抱まづべきなりハ女の忍ぶべき法にてこれハ常に勉強
せざるなりを覚悟せしむべきとなり此意へ得て天のときを
待なバ難産の患ひハなし毫釐之差千里を謬るとなく無
言無用に似て論ずるも及ばぬるなるも有用となるとあれば妊娠の
子の胎内に居るは頭ハ下にあり脚を上にありて居ると

いふ説あれど是を證據とせば柿を見るべし其核を見るに芽の出る
方の頭を下にありて上の方の蒂の方にて芽ハ出ず柿の核
も逆さまに居るなりといふ先僻説なり柿ハ在に柳ハ蒂が下
にありて核の芽の出る方が上にありて居るなれば順に實が
熟せるに随ひて蒂が上にあたる故に核の芽の出る方が下に
なるなれば稲の穂杯も初めハ穂先が上にあるなれど段々と實が熟を
するに随ひ穂先が重くなりて下にあるなれば妊娠の胎内も
初めハ子が頭を上にして脚ハ下にありて居るが順にして天地の
理なれば臨月になりて頭が熟して重くなるゆへなり

胎内にありて生るゝにあり子が逆さまにみゆるといふハ天地の
理に背くの説なりと予が先人ハ賀川産科の門に入りし予も又
先人より此術を学びし京師一貫町賀川玄悦なるハ初之時ハ
鍼治按腹を業として性忠実にして世を渡る志厚くして世に
逆産横産死胎或ハ胎に驚き胎動より難産となりしもの
をハこゞつるし活し救ふて遂に産科回生の手術を創造して
後に予が先師皆川淇園に請ひ発明のことどもを録せられしを
世に弘めんことを告て自身文字に拙きを以て淇園に代筆を
請ふ子玄子産論なるものを撰して梓にしてこれを世に

公けにせしより其名海内に弘まりて産科の鼻祖となりて
其門下弥く世に行る玄悦の男玄吾ハ性卓犖不羈好
尚父と異にして遂に父の家を嗣ずして僑居独立して始めハ
湯洞なることを好みけるが壮年に及びて一生喜楽の業を継ぎて其
術も父に劣らで世に行れて賀川両家となりぬ即今の油小路
の祖なること子玄子女子ありて婿を取りて妻して養子として業を
継ぐ元悦と云先師淇園毎に子玄子の人と為りを賞して予に
語りまし淇園の文筆によりて其業の世に弘まりしことを
嬉く海を辞して悦び恩義を謝せられしよしなり後遂に淇園

と赤子の縁有て嗣子君猷ハ賀川の女を娶て婿となりし
なり子玄子ハ産科分娩の手術を創造して難産産婦の
患ひを救ひれしに功偉なりといふべし医に滋補盛んなり
行はるれハ滋補の弊となり攻撃盛んに行はるれハ攻撃の弊
となる唯医のミならず仏も亦さうなり念仏さかんに行
はるれハ念仏の弊となる禅盛んに行はるれハ禅の弊と
なる日蓮師の念仏無間禅天魔真言亡国律国賊と
説かれしも念仏禅真言律共に皆釈氏の教なれバ一法
を非とするにハあらじ人一法の弊あることを譏られしなり

今世産科の術盛に行ハる世上妊身なれバ産科に托して薬を
服して起居動作怠り父母姑息の愛に溺れて動作をなさゞる
ゆへ臨月催生に及びて腹痛を忍ぶことを能ハず終にハ難産となり非命
に死するもの有是産科の罪にあらず世上唯産科の手を頼みにするの
弊なり妊身假不幸にして逆産横産死胎或ハ子癇或ハ他に驚き
胎動等にて難産如何ともしがたきときに至りて已むことを得ず
して産科の手術を用ゆることなり平生に用ゆべきことに非ざるなり万
事養生にて心を用ひて摂生節を守りて寿を保んことを祈る

養生随筆巻之下 大尾

養生館藏版

文政十年丁亥春三月

書林
江戸日本橋新右衛門町 前川六左衛門
京東洞院二條上町 木村吉右衛門

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan